

人格形成における螺旋的発達理論構築への歩み

——親子の似より感研究の一つの実り——

秋 山 幹 男

A Theory of Spiral Development in the Formation of Personality

——A Result of a Research concerning “Similarities between Parents and a Daughter”——

Mikio Akiyama

キーワード：親子の似より感，人生からのメッセージ，内在性・超越性
螺旋的発達図式，エゴ (ego) とセルフ (Self)

I. はじめに

今から40年位前のまだ若かりし頃，友と二人で理論やその実践について将来の夢を語り合った事がある。現在は第一線の臨床心理士として活躍中の彼は，「まずは，何よりも先に自分が納得できる理論を探し出し，それを土台にして自分の道を創り上げていくべきではあるまいか」と話した。これに対し，「どんなに小さいものでいい。まずは，自分なりの物差し・キーワードとか手掛かりを見つけ出し，それから自分なりの理論を構築してみたいのだ」と応答した。この思い出は，シロネズミを被験体にして回避行動の消去法と消去期の研究に集中的に取り組んでいた頃の話である。当時，入会する少し前の異常行動研究会 (PBD) は，アイゼンクの行動療法を初めて日本で翻訳し意気盛んであった。基礎研究が臨床をリードしていた古き良き時代であった。

今一つ，若い頃に出会った出来事がある。それは41年前，大学院1年次の演習の時間であった (ロシア語を別の友人と自学自習していて，肝心の英語力が混乱を始めていた頃のことである)。助教授の先生方が一同に会しての原書講読の時間に，フランクル，V. E.の『Logotherapy』に触れた箇所があり，心が何故かざわついたのである。小さくなって時間を過ごすしかなかったこの演習で，初めて挙手をして質問した。Y先生の返答では意味が今一つ分からず，再度問うた。でもやはり理解ができなかった。そこで，厚かましくも三度目の執拗な質問にでた。今度は，先生から「自分で学べ」という返答があった。これは了解できた。以来40年コツコツとではあったが，フランクルの学びも開始されることとなった。

時は過ぎ去り，1972年に本学に赴任した。回避反応の消去操作と消去期の分析検討は1974年まで続けられたが，新しい研究分野の開拓に苦労していた。箱庭療法の基礎研究には幼稚園の園児や学生を被験者にして取り組み始めたが，これがなかなかライフワーク化しようがないのである。赴任後担当した青年心理学の授業では，津留宏編の「青年心理学」をテキストに採用した。この中に，エリクソン，E. H.の漸成的発達図式が取り上げられていた (久し振りの興奮

を味わった)。新たに学びの中に彼の著作が加わることとなった。さらには、ユング、C. G.の考え方にも河合隼雄の紹介でのめり込んでいったのだが、今一つこれを自分の理論として全面的に採用することには抵抗があった(何故なのだろうか)。今にいたるライフワークの物差しとなったのは、西平直喜の調査項目75項目を学生の調査に使用したことである。彼は、これを同一性の検査項目として考案していたのだが、「自分とその両親」について質問するものに置き換えて実施したのである。いろいろと試行錯誤があったけれど、75項目は、1985年には56項目に削減され、279人×3(女子学生の捉えた自分・母親・父親)のデータを用いて大型コンピュータによる因子分析を実施した(協力者 有馬道久)。以後、56項目(4因子とその他)を基にデータ分析がなされたが、今では4因子42項目での処理に落ち着いている(F1内向性12項目、F2自己顕示性9項目、F3誠実性14項目、F4明朗性7項目)。

「親子の似より感」というキーワードで研究を括るまでもに紆余曲折があった。“なぜ5件法でデータを得ているのに、わざわざ「はい」「?」「いいえ」の3件法に直して7区分表示し、似よりの群を抽出するのか”という質問を学会でされた事を思い出す。三者(自分・両親)に共通な区分は区分③である。この中に収まったはいといいえの項目の数は、多いものから少ないものまできれいな帯状に並ぶのである(他の6区分ではそうはいかなかった)。この3件法と5件法の併用こそが、今日の意味ある結果に導いてくれたと固く信じている。挫折を何度しかけたらどうか。不器用さと、負けず嫌いとは何かがあるのではと思う一念が、自分なりの理論構築への道筋も創り上げてきたと言えそうだ。1992年からの一連の研究のつらなりが、新しいキーワードを誕生させる切っ掛けとなる。確かに形はまったく見えないのであるが、何かそこにはありそうなのである。1994年の「親子の似よりの現状とそのパースペクティブ」をまとめることから始まり、やっと一つの方向付けをした。しかしながら、理論構築への足掛かりはまだ発見できていなかった(気づけなかったと言ってもよからうか)。

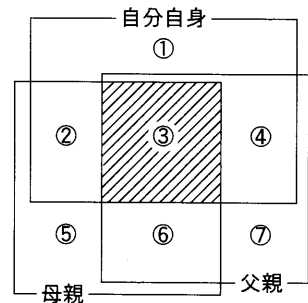


Fig.1 七区分表示図

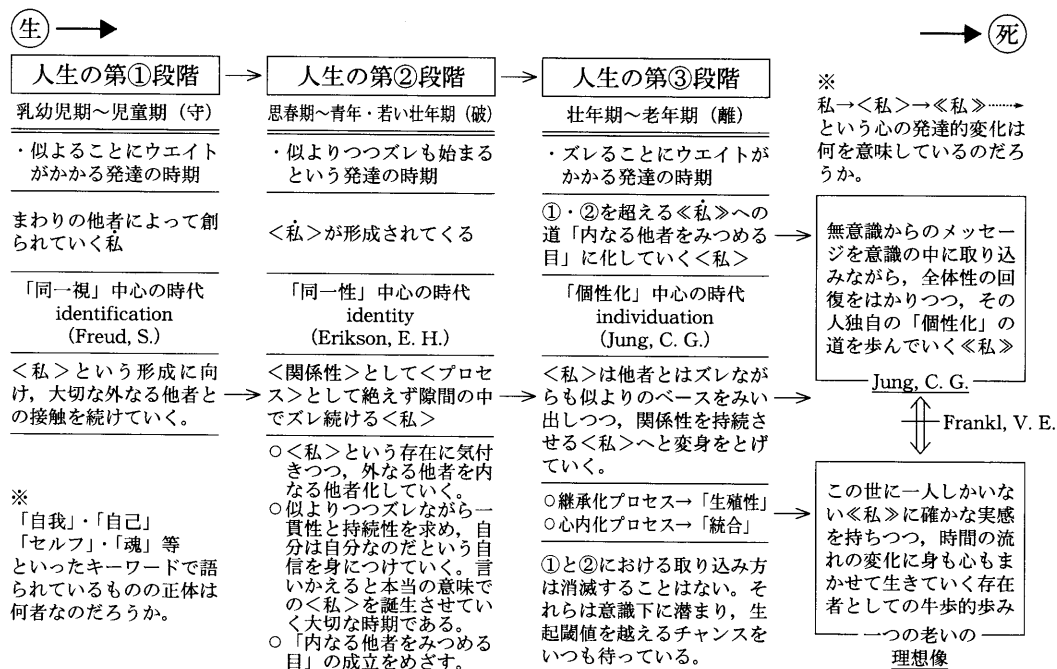
この自分なりの理論化へ向けての作業は、実質的には2000年から開始された。親子の似より感研究は、もう一段階次元の高いレベルの理論的キーワードとして、『似よることとズレること』を生み出した。この種(たね)は、2000年の論文の後半において、「発達の流れの中で、質・量ともに変化し続けていく『似よることとズレること』という人生の三段階説」で図表化がなされ、やっと6年後に芽を出したのである。人生を三段階に分け、①似よりの優位な時期(フロイトの「同一視 identification」)・②似よりとズレが拮抗する時期(エリクソンの「同一性 identity」)・③ズレることを許容できる時期(ユングの「個性化 individuation」)とした。

第①段階：似よることの方にウエイトが置かれる時期。人生のスタートに近いほど、無意識の「同一視」がはたらくことだろう。

第②段階：似よりつつ、しかも同時にズレも作動しはじめる時期。＜私＞というものが内なる他者を見つめ、融合化させていく。また、＜私＞へも少しづつ高まりながら成長を続けていく。

第③段階：ズレることにウエイトが置かれ始める時期。無意識からのメッセージを意識化さ

人格形成における螺旋的発達理論構築への歩み



発達の流れの中で、質量ともに変化し続けていく『似よることとズレること』という概念の立ち上げ

Fig.2 人生の三段階説 (2000)

せ、独自の存在者として全体性の回復をはかる。これは、ユングの「個性化」の道を歩むことであり、心内化プロセスを「統合」に、継承化プロセスを「生殖性」へと高めていく。青年期から壮年期までの親子の似より感研究は四半世紀後に、どうにか老年期までその視野を広げられることとなった。

この時は、<私>をどう形成していくかが主テーマであった。この<私>は、自我や自己意識といったものとは少し距離をおいた（曖昧さを含む）用い方をした。これは、西平（1986：直喜氏のご子息）の論文がベースとなっている。彼は、ワロン、H.の「内なる他者」を手掛かりにして、「私」をどう理解するかという哲学的な考察を試みているのである。

西平の論文から抜き出しをした。①<私>は、<関係において>と同時に<プロセスとして>理解されうる。②<私>は、つねに可能性として存在している。③<私>の在り方は、<私>それ自身の中に隙間があり、ズレがあるのでなくてはならない等の言葉が禅問答の如く頭でこだま化し続けることとなった。

2008年に入り、院生と共にワロン、H.（浜田訳）の「身体・自我・社会」（1983）を精読する中で、自我とは距離を置いた第二の自我（内なる他者）というこの受け止め方のユニークさに改めて気付くことができた。35年以上継続してきている「親子の似より感」という研究は、実際の親子の似よりというものを調べているのではなく、発達の中でこころに取り込まれた内なる他者として作用する、2次的な自我に相当するものだったのである（他者とのかわり方を決めていく大切な<私>という心のはたらき）。この似より感は、愛着スタイル（内的作業モデル）とも親近性がある（あった）。また、似より感の違いが自己意識の持ち方や心理的健康性、さらには、三世代にわたる似より感とも深くかわり合い、響き合うのである。一貫して

自己や対人的なかかわり方の大切な部分を担っている。心内化においても継承化においてもこの親子の似より感研究は、それなりの意味を包含していることが確かめられたと言えよう。

II. ここに至るまでの研究の流れ（概説）

① 若かりし頃の約10年間、シロネズミを被験体にして回避反応の消去操作と消去期の推移を追究し続けた（行動療法の基礎研究として）。まずは、Solomon, R. L.らの二過程説における情動的条件づけの修正を試みた（1968）。独自の生起閾値の誕生である。彼らの考えでは、条件づけられた情動が、ゼロになってからCR反応は減少するという。しかし、非外傷性の条件下でも条件づけられた場の中では、恐れという情動は一旦押さえ込まれたとしても、その後の状況如何によっては、ネズミの行動レベルでも形をいろいろと変えながら個体差を生じさせる力をまだ残していることを確かめた。この『閾値』の捉え方が研究の視点として今日まで生き続けることとなる（意識下と関連づけながら）。…論文数7編（1968-1975）

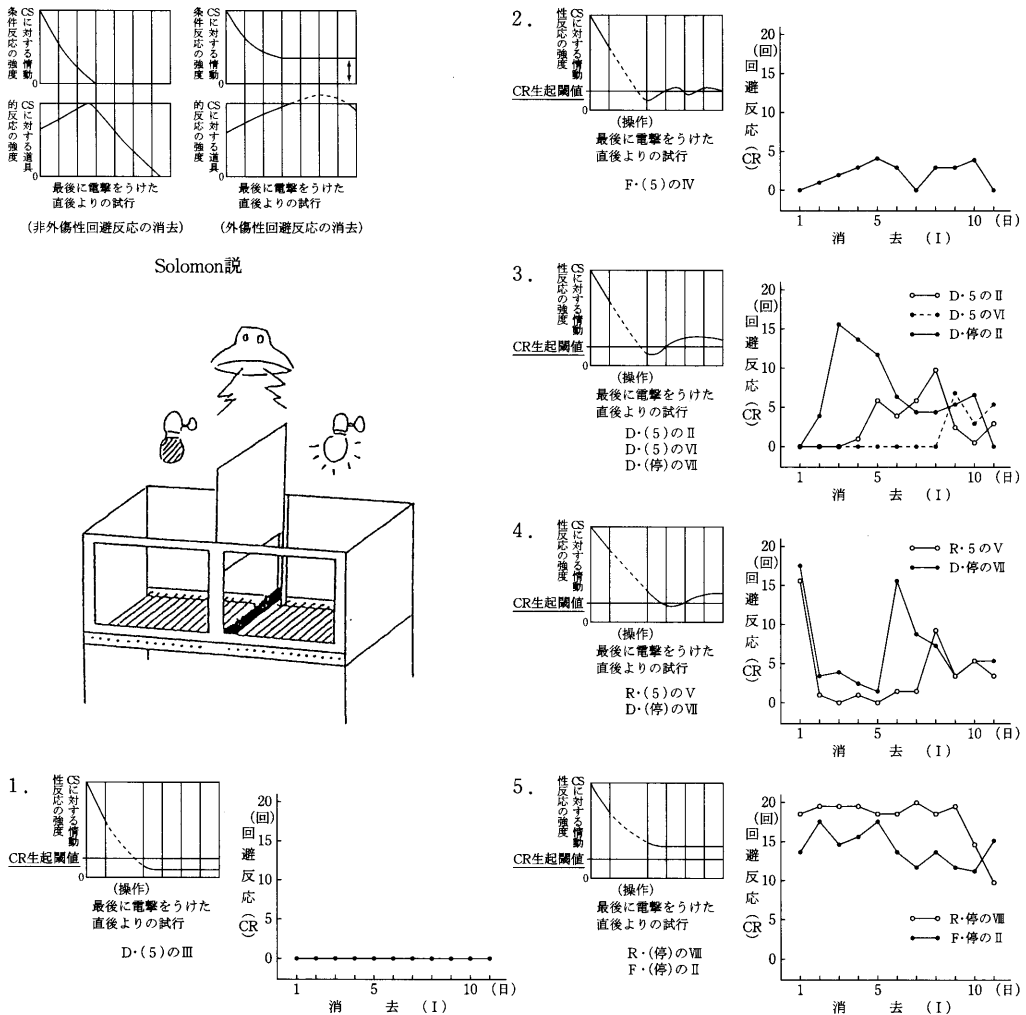


Fig.3 Solomonの仮説と秋山のCR生起閾値（修正）

② 1972年から開始した親子関係に関わる調査は、30数年の蓄積と変節を経ながら、今に至っている。7区分表示法をもとに抽出された親子の似より感（大・中・小群／大・小群）の詳細な分析研究は、1992年頃からその研究の意義を示し始めた（区分③の項目数で群分け）。以来、女子青年、若い母親、女子学生をもつ母親、さらには父親の心内化と継承化の研究という2本柱で論文をまとめ上げ続けてきた。その間、トランスパーソナル心理学やスピリチュアリティの考え方にも触れることができた。また、フランクフルトについては40年以上の学びを並行させ続けている。

意識下、閾値、「その一瞬」、意識化、左の世界と右の世界（内在性と超越性）、魂のプロセス、心の磁場・波動、「人生からのメッセージ」等という研究の視点が次々とその姿を見せ始めてきた。…論文数18編（1974-2007）

III. 理論構築への2001年以後の歩みについて

2001年論文（後半）からの抜き出し：人生を三段階でみる理論モデルの研究は、その後の1年間の学びを次のようにまとめている。

1. 自己と他者のかかわりについて

中村（1999）は、「自分たちのなかに、自分のなかにおのれを異化する〈他者〉を認めない場合、自分たちの集団や、自分という存在は、どうなるのかといえば、本質的にいたずらに貧しくひ弱なものになるであろう。到底、自浄作用をそなえた強靱なものにはなりえない。」と言う。多田富雄の免疫学については、次のような解説がある。“免疫の体系が活着しているということは、（すなわち）自己を決定する働きが活着しているということである”（五木1998）。“免疫系などは、非常に複雑な細胞の構成になっていて、それぞれの細胞がお互いに情報を交換しながら、全体として動いている。”言い換えてみると、“免疫系などは、いろいろな働きをもっている細胞がお互いに相互作用を起こしながら自分自身を維持しているようなシステム”と考えるのである（森岡1999）。「自己と非自己を自分とは何かというアイデンティティを確立する働きとみなす。新しい免疫論では、非自己の延長線上に自己があると考え、自己と非自己の共生の可能性を探そうとするものにシフトされている。自己と非自己の関係が、試行回数（出動）の増加にともなって非自己に対し幅をもつようになる（五木）。

2. 霜山（1978）の「まわりに立ちこめた雰囲気」の補充について

小川（2001）の「環境見つめる知」を探し出した。環境も雰囲気の種類であり、この雰囲気は、人間を取り巻く根源的な状況であるとみなしている。「人間は状況のなかに、環境のなかに、なによりも雰囲気のなかに生きる」という考え方がそれである。

3. 全体と個のテーマについて

清水（1992）の「場の力」にも注目した。人間が生命活動を営む「場」は、それぞれの細胞が「個」であろうとする性質と、天体のように互いの引力の総和として「全体」になるという性質の双方で成り立つと彼は述べるのである。

4. 「その他の関係」という概念について

鶴見・浜田・春日・徳永（1999）の討論は、高齢化社会における「距離感というもの」に触れている。その他の関係は、距離を保てることと、待ち控えることを主眼とし、命をかけた関係となるのであるが、これからの日本社会は、その他の関係の力を借りることで、老人も家族も再生の可能性が出てくる。霜山の「適正距離」の延長線上にあるキーワードと言えるだろう。

5. トランスペルソナルな世界への旅立ちについて

この一年間は、Maslow, A. H.の至高体験から出発し、Frankl, V. E.のロゴセラピーとRogers, C.の来談者中心療法・エンカウンターグループを経て、Wilber, K.の万物の歴史に辿り着いた。いよいよトランスペルソナルな世界への視野の拡大である。

ここでは、フランクルの人生の意味とウイルバーの「超えて含む」に注目してみたい。

フランクルの考え方：人生の意味は向こうからやってくるものである。人間を超えた「向こう」の次元からのメッセージが同時にあらゆる人間の足下に届けられている。人が「意味」の呼びかけに呼応する時、まず無意識の深層がその呼びかけに感受し、呼応して、それそのものが決断する。そして次のこの深層レベルでの心の働きを自覚し意識化して表出していく。「私の底のいのち」においては、自他の区別がなく、私と世界、私と宇宙はひとつである。なすべきことは私を超えた向こうから常に既に送り与えられている。

ウイルバーの考え方：①いわゆる混沌からの秩序。②進化には全体にわたる連続性がある。③主体、心は、発達してきたものとしてのみ捉えうる。④<すべて>はまわりではなく、あなたの中で展開していく。⑤より大きな深さ、より狭い幅という受け止め方。

2002年論文（後半）からの抜き出し：トランスペルソナルな世界（心理学）の学びを深化させるための一年間であった。「自己を超える」・「超えて含む」とはいかなる事なのかを探り出すのが主な仕事であった。

1. ある放映について

この年の考え方の急転換は、宇宙の進化と「真空のエネルギー」のかかわり方についての放映（NHKスペシャル 2001.11.25.）にあった。宇宙はまだ膨張を続けている。宇宙が広がれば広がるほど“真空のエネルギー”は大きく空間を押し広げていくというインフレーション理論は、とても魅力的であった。宇宙の誕生であるビッグバンは、なぜ起こったのか。それ

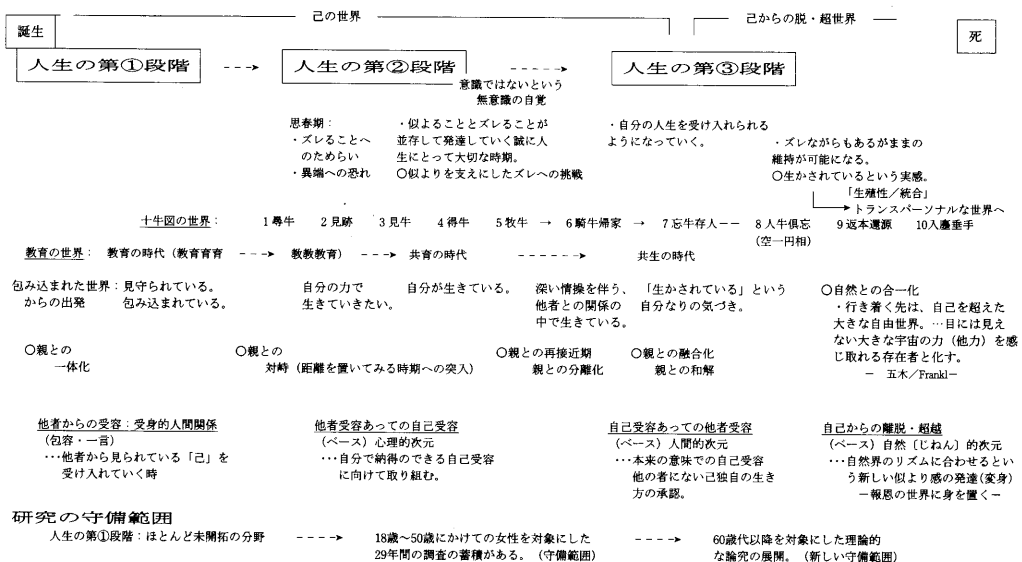


Fig.4 「似よることとズレること」という対概念をもとにした理論モデルの拡大と深化に向けて（その2）
— いろいろな学びとタイアップさせながら — (2001)

前はどうかということもこの理論は射程距離に置くらしい。無数に宇宙が発生し、それは永遠に続く。生と死を繰り返していくのである。「ワームホール」とは、時空の歪みによるトンネルであり、二つの宇宙がワームホールで繋がる。つまりは、異空間への通路なのであり、これを広げるのが真空のエネルギーだという。この宇宙の進化の論の詰め方は、筆者の理論構築への動機をさらに大きく高めることに結びついていった。

2. エリクソン, E. H.のライフサイクル理論をもとにして

親子の似より感研究とその上位の対概念である「似よることとズレること」は、一人の人間が自分の人生の第②段階をどのように過ごしてきたかに大きくよりかかっている。その後の人生の第③段階は、Eriksonの第Ⅶ・Ⅷ期と深くかかわる。

自己を超えるというトランスパーソナルの視座の中で、「似よりとズレ」という対概念の深化・拡大を『超えて含む』とどう融合させるべきか。私に始まり、＜私＞を限りなく他者と関係づけながら融合化させ続け、いつの日にか一瞬の《私》となり、それが自然（じねん）に溶け込んでいく。自己であり続けながら、ある時自己をも超越してしまうという受け止め方は、どんな世界を切り開いていくだろうか。いや、超えて含まれるのだろうか。

3. 意識の場について

氏原（2000）は、無意識は意識があつてこそその存在であると説く。つまり、因と地の関係性にそつて考えるのである。この意識の場という認識は、無意識という世界が別があり、それに気付いていくというのではなく、意識をバックにしてこそ無意識がその存在をチラリと見せる、または、垣間見せるという存在なのではあるまいか。この考え方に『生起閾値』を重ね合わせると、竹内（2001）の直感が冴えてくる。「人間が成長するのは、ある瞬間、全力をふるって一つの淵を飛び越える、あるいはよじ登らなければならないであろう。生きることを表現するとは、すべてが一つになって人が成長する瞬間がそこにはあるということだ。たとえ目に見えない水面下（意識下）で一段一段と積み上がってきているとしても、表層の意識レベルではある瞬間に生起したと感ずる（認知する）のである。」（引用は編集し直されている）“変性意識状態で自己を超える体験をする”というトランスパーソナル的な考え方もここでは取り込める。

4. ウイルバー, K.の理論的統合について

彼は、いのちの進化についての遠大なる仮説を構築した。ウイルバーの考える成長・発達のプロセスは、特定のアイデンティティや特定の能力が、超越され包括されて成長していく場合と、超越され放棄されて成長していく場合があるとみている（吉福1989）。

『融合する』とは、＜私＞が、わたしに無いものを身につけている外なる他者と出会い、何かを吸収しようとする時、彼との似よりの部分に自分を合わせつつ、その一方で気になるところを心で感じ取り、内なる他者化させていく（ズレを受け入れ取り込み溶け合うのである）。この関係性とプロセスが、絶えず働き合い螺旋的発達を続けていく。この何時か何処かで、変性意識状態のもと＜私＞は一瞬《私》となり、自己を超える体験へと導かれる。この内なる体験（マイクロコスモス）が、外なるさらに大きな宇宙（マクロコスモス）のもつ融合・包括の力の中に吸い込まれていく。宇宙という磁場に応じる力を《私》が持つことによって、ある瞬間に大変身を遂げるのである（スピリチュアリティの世界）。

2003年a論文（後半）について：河合（1996）は中年クライシスとして、「父母既死以後の親子関係」の大切さを取り上げている。親が死んでも、その「関係」が消滅したりはしない。それは意外に続いており、しかも、変化していく... 深い孤独の体験とともに、いろいろな

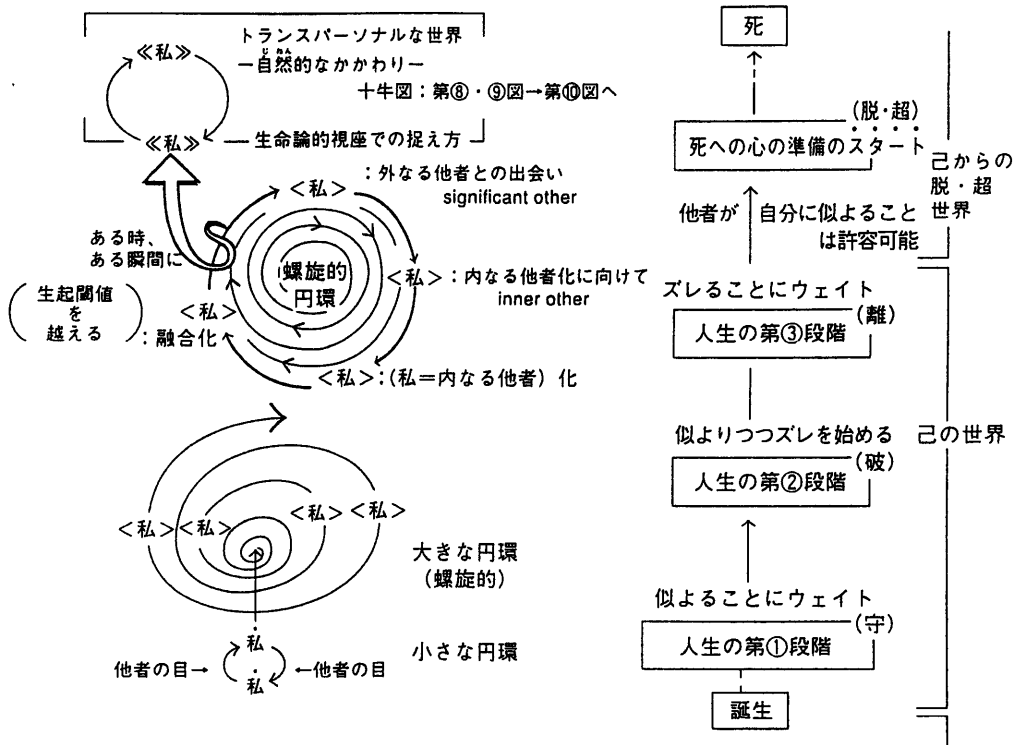


Fig.5 <私>の融合と<<私>>の融合についての螺旋的円環による捉え方
 -<私>から<<私>>へ：ある時、ある瞬間に- (2002)

「関係」の見直しが迫られる。こんなときに、まったく忘れていた両親との関係などが生き生きと思い出されるのである。さらに、彼は「科学の対象としての現実」にも触れている。現実そのものは多層的であり、そこには唯一の正しい現実があるのではない。その多層的な現実をどのように知り、どう折り合いをつけるかという困難な仕事をするのが中年なのである。このところがうまくいかないと、青年のままで年をとるので、老いや死を迎えるのが大変となる。

2003年b論文：空からくるエネルギーとは何か

ダライ・ラマ14世とジャン=クロード・カリエールの対話（「ダライ・ラマが語る」）をメモに取り、論文としてまとめ上げた（ここでは、分かりやすく編集し直している）。

1. 人間を含めて、どんな生きものでも世界の外、宇宙の輪の外には出られない。私たちはこの輪の一つの部分なのです。宇宙の根源的な力の一つは、「核力」が宿っているということです。仏陀には「最も微細な原子の中央に宿る」という一節がある。東洋では、つねに限界を持たず、いたるところに広がっていくものとして宇宙を捉えていたのです。
2. 今の人間は、波立った海面だけを見て、その下で人間を支えている安らぎを知らない。一人の人間の心が心の全体像を捉えることもできない。人間の心は本来コントロールしがたいのです。心が生みだす現象が把握しがたい理由の一つは、今日では無意識と呼ばれる神秘的な領域が心のなかにあるからです。心の安らぎは、ゼロからつくりあげるのではなく、発見すべきなのです。心の安らぎを発見すると同時に、本当の知への道も発見できるはずで。
3. 人間は世界の部分ではありません。一人一人が世界そのものなのです。自分は絶えず解体

し編成される無常なものにすぎず、独立した個人としては存在しない。つまりは、世界の全体と結びついている。心を浄化する一番大事な道具は、心そのものです。心の働きの気をつかい、多少でも注意を払えば、心の重要さに気づいて驚くはずで、心は、あらゆることがらの中心にあるのです。

4. 素粒子は、別の個体の一部となり、個体はいわゆる死を経験する。脳が停止すれば、人間の心や意識は完全に死ぬとしても、人間を構成する根源的な物質は不滅なのです。心は心以外のものから生まれはしないのですから、微細な心に始まりはありません。微細な心ははっきりあらわれれば、物質の捉え方自体がまったく変わり、始まりという考えさえなくなるのです。仏陀は微細な心の具現だったのです。人間の意識は絶えず変化し続けます。不易なものは何もなく、何かが変わるときには、かならず大きな変化がともなうのです。
5. ビッグ・バンは、宇宙の歴史を人間が解釈するための出発点なのです。宇宙についての人間の解釈の始まりです。何らかの生きものが、あるとき、この宇宙が存在することに歓喜した。だからこそ宇宙は存在するのです。現在学者たちは、《暗黒物質》や《ミッシング・マス》と呼ぶまったく別種の物質が存在すると確信している。この物質は、原子核を持たないため、研究できない。それにもかかわらずこの物質の存在は、天体がこの物質から重力を受けていることで確認される。しかも、宇宙ではむしろこの物質の方が《主流》らしいのです。
6. 心とは、身体という物質に宿る、微細で捉えがたいエネルギーなのです。一番高いレベルの心はけっして消滅しません。そのレベルの心は、智慧のようなもの、空間も時間も飛びこえる、内面の師、最高の導師なのです。私たちが《存在》というのは、まさしく微細な心なのです。微細な心は、膨大な時間のあいだ、かたちを変えつつ仏陀の境地を求め続けます。仏教は、心を無と捉えないように努めるあまり、まさに世界を超越してしまったのです。高い質に達した心は心自体を忘れ、個々の存在は、それ自体ともそれ以外のものとも完全に一体となる。心は、あるがままに心そのものであり、世界の全体と距離もなく一体化するのです。
7. 私たちは空なのです。人間を構成する物質は、いわば空なのです。人間がその部分をなす世界は、一つの流動体なのです。さまざまな状態の流れなのです。だからといって、世界が無だということにはなりません。ほかのものと分けられないから、《空》なのです。あらゆる形は、独立して存在するものが何もない状態、つまり空のなかで生まれるからです。形のない空には意味がないのです。かくして一枚の紙は空であり、空はすなわち充溢、つまり、宇宙全体を孕んでいるのです。輝かしい統一が全体を覆い、そのとき空と光明は一体となるのです。
8. 一つだけ疑えないものがあります。人間はみな、自分のなかに潜在的な力を秘めている。般若と呼ばれる力を、表に出せばいいのです。たとえほかのすべてを否定しても、人間の持つ、自分を高めるこの潜在力だけは否定できません。

2003年c（未発表）Frankl, V. E.との関わらせ方について：諸富（1997）から抜粋し、これらを一つに系列づけてみたものである。ここではその一部を取り上げておきたい。

1. フランクルの概念は、①自己超越 ②自己離脱 と ③「精神的無意識」にある。これらの考え方をベースにして、「人生の意味」は向こうからやってくるとみる。人間を超えた「向こう」の次元からのメッセージは、同時にあらゆる人間の足下に届けられているのである。

さらに、「意味への意志」とは単なる意識的努力ではなく、意味からの呼びかけに呼応する心の働きであるとする（無自覚の心の働きとは、より深い層の心の働きなのである）。フラン

クルの「精神」とは、心理的次元の情動にある時はあえて従い、ある時は抵抗する「主体」としての心の働きであると押さえておきたい。

2. 真の自分は常に「見ている」のであり、決して見られないこと、見ることのできたと思うのは既に「真の自分のしかばね」でしかない。また、決断する主体としての自我も無意識である。無意識の深層の中核を占めるのは、主体的・実存的な性格を負った「私」(自我)であり、その無意識の自我そのものが決断し実存すると考えた(無意識の深層レベルに、しかもその最深層に自ら決断する「主体的な心」の存在を認める)。
3. 人が「意味」の呼びかけに呼応する時、まず無意識の深層がその呼びかけを感受し、呼応して、それぞれのものが決断する。そして次のこの深層レベルの心の働きを自覚し意識化して表出していく。底の底の「自己の根底」は、そこへと「呼びかけてくる」意味の力に呼応する仕方では決断する。「呼びかけ=呼応する」働きは、それ自体で力に満ちていて、それぞれのもので立っている。「自己根底のいのちの働き」は、まさにこの意味で、単なる自我的主体を超えた真の主体なのである(自我をその奥に超え、その深みをどこまでも突き進んだ末にぶち当たる「底の底」=「私の底」に与えられた『いのちの働き』)。このことは、絶体絶命の危機においてはじめてそれと気づかされると言う。
4. この「宇宙」は、秩序に満ちたコスモスである。意味に満ちていて秩序がある。逆に空虚で無秩序(心の虚しさの投影)と考えることも可能であるが、それは我々の主体的な選択にかかっている。「生かされている自分」の発見とは、「自分のいのち」が「他のいのち」とつながっているという実感である。自分の「いのち」とこの世界この宇宙のすべての「いのち」とは、本来一つのいのちであるということ、まさに「からだ」のレベルで実感する。このレベルの私はまさに死なない。「私の底のいのち」においては、自他の区別がなく、私と世界、私と宇宙はひとつである。

2004年論文(後半)より：家族システム論を越える考え方に向けての始動である。

親子の似より感に関わる一連の研究の積み上げは、確かに家族関係から出てくる真実の一面に触れているという実感が強まってきた。親子の間で擦れ違った感情や認知は、年を重ねるにつれて膨らんでいく。また、意識の場が捉えた無意識という世界の中にも深く沈み込んでいく。

表向きマイナスの進行と同時にプラスの進行も意識下では行われていて、それが熟して時とチャンスさえあれば、閾値を超えて現実のものとなるのではなからうか。このように考えると、早坂(1994)が25年間かけて掴み取った「関係性」にもアプローチできそうである。

1. 養老の「手入れ」概念について

養老(2003)の里山の手入れという考え方は、人間関係にも役に立ちそうである。彼は、荒れ果てている里山の復活はこの手入れしかないと見ている。里山は、刻々とその姿を変える複雑なシステムを蔵している。「手入れ」とは、バランスを崩しやすいこの里山のシステムに、加減を見ながら手を加え、さらに強固なものにしていくというものである。「相手は自分の脳を越えたものとして認め、できるだけ相手のルールを知ろうとする。これが自然とつきあうときのいちばんもっともなやり方だと思う。手入れはできてコントロールはできないのである。」この考え方は役に立つ。家庭もまた、手を入れ合いながら時間をかけて積み重ねていく努力と根気のいる、人間関係を学ぶ発達の場合なのである。

2. 村瀬(2001)の「構造的カップリング」の考え方について

生命体は、すでに決められているものだけでなく、さまざまな状況(カップリング)の中でさまざまな可能なかぎりの組み合わせを案出することで創造されていくものである。一つであ

りながら二つとして、つまり「一つは二つ」「二つが一つ」として、絶えず構造的にカップリングされて成立しているのである。常に周りをとりこみ、自らも周りの一部になる。そういう構造的な相互性である。「いのち」はいつでも、どんなものでも「カップリングとしてのデザイン体」なのである。

3. 多田の免疫学における「あいまい性」のもつ意義について

「あいまい性」こそが、生命をしなやかで強靱なものにしている。生命のシステムには従来のシステム論で説明できない部分がある。免疫の場合は、初めから多様な要素はなく造血幹細胞という単一の細胞があり、それが赤血球になったり白血球になったり免疫系のさまざまな細胞になって、最終的に非常に多様で、自分以外のものを認識して反応し、しかも自己を守るシステムをつくっていく。初めから全体が決定されているのではなくて、自分で自分をつくり出すというプロセスである。これも、親子の似より感形成には十分当てはまり、納得のいく考え方のように思われる。

4. 中沢 (2003) のまとめた「ヴァーチャル」という概念について

物質の世界の新しい認識法の特徴を取り出したものである。①「ヴァーチャル virtual」という概念は、たんなる観念的な描像でもなければ、抽象的な想像物でもなく、明確な具体性をもっている。すなわち、量子論があつかう時空は、「ヴァーチャル」な時空として、潜在的な可能性を内蔵した具体的な時空なのである。その「ヴァーチャル」な時空に内蔵された潜在性が現実体 actual に変わるとき、物理的に観察可能な事象が出現する。量子論はその観察可能な物理量だけから「ヴァーチャル」な時空の仕組みを推理するのである。②量子論的な事象は、つねにものごとの総体をあつかうことができなければならない。それを、局所的に孤立した出来事としてあつかおうとすると、かならずその理論は破綻する。個体におこる変化はつねに全体の変化を呼び起こし、個体は全体との照応関係のなかではじめて決定されるのである。

2006年論文(後半)からの抜き出し：人生の第②段階における特別な体験と、人生の第③段階がもたらす心の変化に関する研究というタイトルで論を推し進めた。ヴィーダマン、F. (1986/訳1999)の「魂のプロセス」がベースとなり、理論的な発展が得られた。

「潜在化」・「閾値」・「その一瞬」という3つの言葉がうまくかみ合わず、2年という空白期間が生じていた。彼の考え方を知り、詳しく調べ上げることによってやっと事が展開し出したのである。まず、トランスパーソナル心理学は、直線的に捉えられがちになると指摘しているが、それは、前個一個一超個という論の進め方がそのように受け止められやすいということである。確かに、人生の第②段階でも自然の神秘に包まれたり、若くして死や危機に直面した人が、自己を超越する体験をしているのである。

タゴール、R. (1861-1941)は21歳のときに、人生の第二の誕生ともいうべき深い精神体験をしている。有限の時間の中に、永遠なるもの、無限なるものがやどっていることを直感し、自分の生命が宇宙の霊と一体であることを悟ったのである。ロマン・ロラン (1866-1944)は23歳のおり、マッターホルンの連峰の中で、「一瞬、わたしの魂はわたしを去って、ブライトホルンの光り輝く山塊に溶けこんだ。数分間わたしはブライトホルンになっていた。」とノートに書いている。この体験は、「人間は互いに合体できる」という神秘的な信念に結晶化していく(1921年この二人はパリで出会う)。

和田 (1907-1993)は27歳の春、死を寸前にして不思議な奇縁に恵まれ、人生の大意を知った。山路に人知れず、ひっそりと咲いている一輪の花を見たとき、真実の生き方に目覚め、正しい幸せ観を抱けるようになったのである。この野の花はただひとすじに咲いて、そして実を

結び黙って死んでいく。それゆえに美しい。私は純粋に、良心のままに、真実の生き方をしていこう。そうころに決めたとたん、根源的な安らぎが感じられ、嬉しくて嬉しくて、涙が次々にあふれては流れ落ちたと述懐している（伊藤1989）。神谷（1914-1979）も、夫と彼女の青年期に起きた体験に触れている。共に静養を余儀なくされ、孤独な時間を延々と過ごしている（そのあり余る時間は読書や勉強にあてられた）。与えられた運命を広い心で受け入れることで「新しい生きがいの芽」を発見し、小さな自己を超えた大きな力との出会いを果たし、そこに尽きないエネルギーの源泉を見出したのである。死病との闘いは、精神的独立のために大変よいことだったと述懐する（二人は、共に学者として31歳の時結婚された）。以上、5人の体験は人生の第②段階において生起した希有なる体験であろう。

人生の第③段階に入った人間にとって、この境地はゆっくりとではあるが開けてくる。50歳代にはいると、大抵の人たちが「生かされている」という実感を持てるようになる。これは、さらに年を重ねるにつれて色濃くなっていく。和田（1984）は、不思議なガラス板で喩えている。右側からは左側が細大漏らさず透けて見えるが、左側からは右側の様子は全く見えない。従って、左側にいる人はガラスの向こう側には何もないと思っている。ところが、実は右側には「意味」の詰まったいのちが充満しているのだ。このいのちの中からは左側の風景が手に取るようにわかるという。鎌田（2000）は、「がんばらない」ことを患者に語りかけている医師である。大事なことは「命の長さ」ではなくて「生きていくことを喜べる」ということなのだと話す。よく考え、よく生き、不器用だが手ごたえのある生が見えてくるような生き方、他人をうらやまない自分流の生き方をしたいと言う。加島（2007.7.8.放映NHK教育：こころの時代（再）「内なる風に吹かれて」84歳）は、老子の道徳教を英文から自由訳した人である。72歳の時に「タオー老子」を出版している。彼は、伊那谷の支流を散策中に不思議な体験をした。目標があって動いているときは、周りの音が捉えられないのに、ゆっくりゆっくり動いていると、見えなかったものがたくさんあることに気づいたのである。川の流れる音を聞きながら河原で寝ころびまどろんだ後、目覚めた時数秒間石やら草やら木と一体化していた（ほんの瞬間の出来事）。頭でみる世界とは別の世界がある、自分を動かしているもの（エネルギー）が心にもあらゆるものの中にもあるという実感であった。伊那谷に来て、目的のない世界からみるとよく見えるものがあつた。ゆっくり歩いていると、風の正体を見ることができたと言う。

“谷を緑で埋め尽くすものは「水」！自分の中にもこの「水」の流れはある。”まさに、伊那谷の老子である。（加島については2007年の論文に記載しているのだが、この度はここでも取り上げ、追加しておいた。）

「潜在化」・「閾値」・「その一瞬」と言うキーワードが、静かに混ざり合いつつ息づき始めた。私は私であり続けたいが、同時にまた「共に」ありたい。人生を歩み続ける中で、「共に」の内容は変化し続けていく。似よりつつズレながら『変身』していく自己（私・＜私＞・《私》）は、「共に」の変化プロセスとして受け止め直すことによって理論的停滞は前進へと導かれたのである。ヴィーダマン、F.の主なる主張は、「内在性と超越性だけでは人間の心の有り様を説明しきれない」である。この二つのこころの世界の間には、自己実現と自己超越の世界を“つないだり”“統合したり”“行き来したりする”ことのできる『魂のプロセス』が必要であるとする。諸富は解説の中で、①人間存在に潜む根本的な葛藤、矛盾、ジレンマをすぐに解消しようとせず、そのまま大切にし、二つの極を“つなぎ”“行き来する”プロセスを描くこと。②プロセスそれ自体ではなく、二つの対立する極の“つながり”や“往還運動”としてプロセスを描くこと。この点が、従来の心理学におけるプロセス概念とは異なると指摘している。このよう

に、ウイルバー、K.に出会い、さらにヴィーダマン、F.の『魂のプロセス』の論考に触れたことで、新たな展開が可能になったのである。

人生の第①段階での私（周りから〇〇だと見られてきた）が、第②段階の〈私〉となり、その〈私〉の中であるきっかけから《私》への超越が一瞬生起する。暮らし向きの実生活を支えている内在性（〈私〉）はしっかりと維持しつつ、超越性の次元でもまったく別種の新しい似よりを体験していく自己（《私》）が存在するようになる。この内在性と超越性は同一線上に生じて置き換わるのではなく、並行しながら、行きつ戻りつしながら自己（〈私〉と《私》）を発達させていく。「今ここ」にこそ永遠が存在し、それは年を重ねるにつれて宇宙意識・大いなるもの（神・仏、サムシング グレイト）と言われているものに近づいていくのではないだろうか。たとえそれが実際には適えられるものではないとしても、人間という生命体はそれを目指して誠実に謙虚に歩み続けることが求められている。

2007年論文（後半）からの抜き出し：2006年は、理論構築を補強する作業の一年であった。

加島（2000）によると、「タオ」の方向は、状況が変化しても、生きている存在そのものとして次に何があるかを求める。つまり、何とか生かそうとする方向に「タオ」は流れていくのである。ネイチャーは、絡まり合うことで共存しようとしてきたのではなかろうか。「小さい個を包み込む全体」が、粘り強さを与え、安らぎのものになる。彼は、2006年の理論図の右の世界と左の世界のかかわり方を、タオという視点から話してくれているようである。

岩田（2005）は、ユングの「共時性」を『同時の現象』と置き換えて論述を進める。彼の新境地は、道元の境地・「宇宙」であろう。1. 時空の仮説を排除せよ（身体そのものを鏡にする）。2. 眼前の山水が曇りなく見える（大切なのはそれだけ）。3. 結局は一つなのである

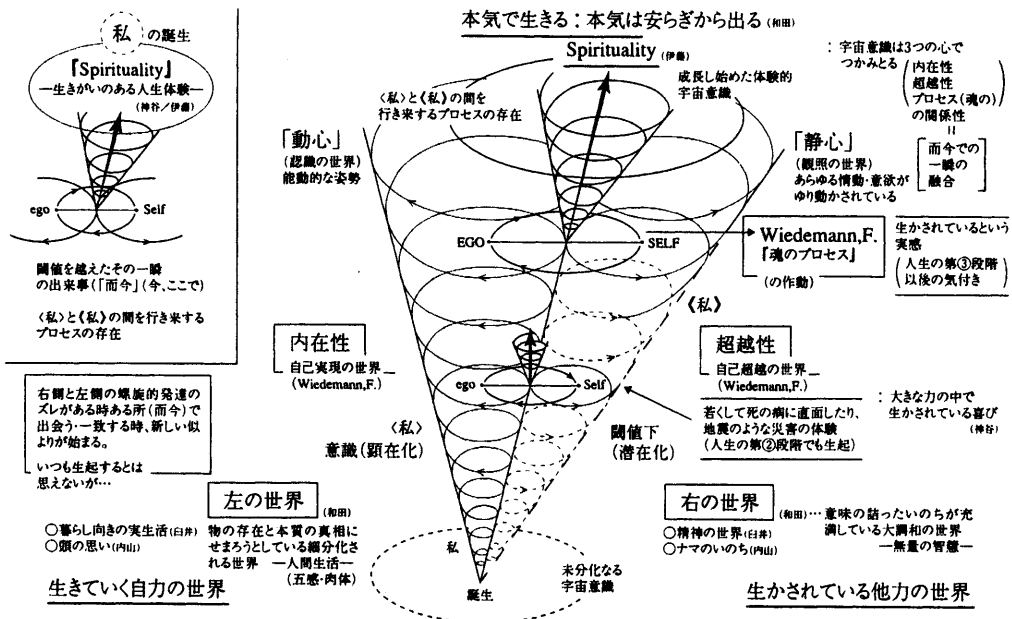


Fig.6 内在性・超越性・魂のプロセスを踏まえた人間としての全体性への螺旋的発達図
—右の世界 (Self) と左の世界 (ego) — (2006)

(「二にして一、一にして二という関係)。4. 人間と人間, 人間と自然, 人間と仏祖が一对一対応をしたとき, そこに自由に流通する世界が現出する(対応する場が開けるでもよし)。5. パターン(諸相)と非パターン(非相)を同時に見る(「同時」という場所にたどりつくと, 如来が見えてくる)。6. 「見る」から『見える』に変わる(「心身脱落しきたる)。7. 折り返し地点に達したとき, そのときに一挙に全宇宙がその全体像をあらわす(水中と水上, 内と外, 諸相と非相が同時にキラリと見えたのである)。8. 個体と全体が, そこでキラキラとかがやき, 世界がキラキラとかがやく(同時発心あり, 同心発時なり)。9. 眼前の風景のそれがどのように見えるか。大事なのはそれだけである(われの場所に坐って眺めると, そこからそこへキラキラ光る場がツブツブと連なっているように見える)。そういう場から構成される宇宙は即道元の宇宙なのである。

ミンデル, A.はプロセス指向心理学(POP)の提唱者である。量子物理学を研究していた学者であるが, ユング派の治療者となった。その頃大病を患い, 苦しみながら自力で回復し, その体験が独自の治療法を創り上げていく。諸富(1999)の解釈によると, 「人生を一切の自然の流れ(プロセス)と捉えて気づきを得ていく」のがPOPということになる。ミンデルはドリーミングの視点に立ち, スピリチュアルな解釈と心理学的な解釈を駆使している。前者は「それ」の視点, 後者は自分の視点である。夢の創造主の顕現として夢を理解する。と同時に, 自分自身の一部として身体と夢を理解するのである。痛みの創り手と痛みの犠牲者は共に自分のなせるものと考えるところから新しい心と身体の治療法がその姿をみせてきた。一定の距離をとり, じっと見守り(瞑想し), 対話するのである。身体と夢は沈黙の力からのメッセージである。ドリーミング→ドリームランドは非合意的現実なのであり, 顕在化している意識は合意的現実位置する。この二つの現実の閾を越え自覚を高めることは可能である(潜在的可能性の自覚化)。これまで40年にわたって取り組んできた“フランクルの辿り着いた地点”とこのミンデルの捉え方は, まさに近似点に存在しうるように思うのである。

もう一人の紹介者は, ユング派のヒルマン, J.である。彼は, 「スピリット」と「ソウル」を使い分けている。スピリットは山のかなたを目指すこととし, ソウルは深い深い谷間を想うこととしている。この考え方も十分役に立つものである。

全体性への螺旋的発達図(2006)は, 加島, 岩田, ミンデルを取り込んでいくことで, さらに新しい視界を開いてきた。ここまで辿り着くと, 次には『場』の視点が重みを増幅させてくる。潜在化の右の世界の螺旋的進行は少し早めの歩みをする(一つの仮説として, 時空の超越・融即状態の中で)。これに対して, 左の世界の受け止め方は少し遅れて逆方向の螺旋的発達を進めると捉えてみた。これが日常の非合意的意識と合意的意識の状態である。ところが, ある時ある場所では一瞬の出来事として共通の場が発生することがある。右と左の螺旋が合流する(触れ合う)のである(沈黙の力による軌道修正)。すると, 変性意識状態化し, 「ハッ」とする瞬間が生起する。ミンデルは, 素粒子とは「波動であり, 物質である」とする量子物理学をもとに, 心(身体と夢を含む)もそれに逆らわないとみている。スタートからゴールまでのプロセスは様々であり, 因果律ではない縁起の世界である。それは共時性の可能性を示唆している(岩田の『同時の現象』)。その一瞬の場に生起した魂のプロセスは響き合い, 作動を開始する。Selfとegoの循環はそこに心の磁場(波動場)を作り出す。この変性意識状態の中で, 右のセルフと左のエゴは波動を生起させ, 螺旋の接点で共振し, 「含んで超える」。その共振が一点での心の発火を引き起こし, その一瞬に閾を越えてスピリチュアリティ(霊性)の螺旋が立ち上がる。時と場の折り合いがつけば, いつでも閾を越え, それは積み重ねられていくのである。

人格形成における螺旋的発達理論構築への歩み

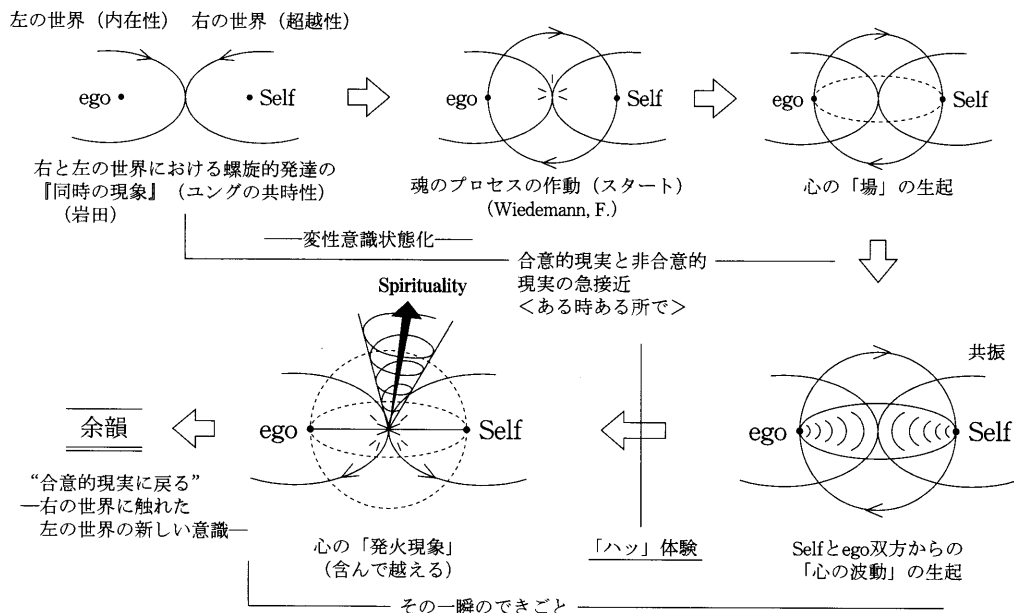


Fig.7 閾値を超えたその一瞬からスピリチュアリティ生起までの模式図
—『潜在化（意識下）』・『閾値』・『その一瞬』を組み込んだ同時の現象—（2007）

（心の財産と化していく）。いつの日にかそれらは体験された宇宙意識としても実感できることだろう。

IV.（2008年）理論的進展に向けて

2008年11月15・16日に行われる日本パーソナリティ心理学会第17回大会（開催、お茶の水女子大学）では、Frankl, V. E.の唱えた「人生からのメッセージはいつも深いいのちの底の底に届いている」を螺旋的発達図の中で捉えてみることにした。これは、2006/2007年の模式図をベースにして、「人生からのメッセージ」をどう入れ込むかということである。一つの理論的な仮説を立てるとするならば、左の世界からは見ることでできない潜在化の右の世界（超越性）で解決できる可能性がある。混淆・融即・同一化（同化）というワロンの用語も用いてみたい。発達的にみてある条件が満たされさえすれば、この3つの状態が何時でも機能し、如何なる所でも一瞬のできごととして人生からのメッセージは受け止められる（深いいのちの底の底においてである）。

ミンデル（2001）は、電子が強力な場に入る時に起こる運動の神秘に触れている。それはファインマンの時間逆行理論であった。2001年には大貫訳で彼の体験談を読んでいた。その時にも、その本の解説“とらわれない発想”（江沢）においてこの電子と電磁場の量子力学の貢献で、シュウィンガーや朝永と共に1965年ノーベル物理学賞を受賞したことも示されていた。ところが、文字からこの理論をイメージ化することはまったくできていなかったのである。この度ミンデルの著書の中から下記の図（Fig.8）に出会い、再度読み直してみた。すると、何と今度はしっかりと受け止めることができたではないか。トランスパーソナル心理学でも、ファインマンの理論でも、仲介してくれる人がいて時が熟すと、自分の思考の枠に取り込めるようになるみたいである（逆にいえば、これまでは推理ができなかったということでもある）。

エリクソンの漸成的発達図は、対角線上に8つの対概念が書かれているだけである。それ故に、左上の余白と右下の余白が大きな理論的可能性を秘めてくる。これと関係づけてみると面白いと考えた折りに、右の世界と左の世界では螺旋的発達の進行状況がズレる。しかも、右の世界の方が左に比べて先行するというアイディアが生まれてきた。

Selfとegoが遭遇する今ここ（而今）は、かなり以前（または少し前の）のSelfが遅れて辿り着いたこのegoと変性意識状態のもとで心の磁場を生起させ、波動化して触れ合う。そうになると、少し先を進行中の而今のSelfとの時空的な問題はどうかになるのだろうか。ここで混淆・融即という現象が意味を持つ。今のegoは先を進むSelfと結びつき、先を行くSelfは時間的には過ぎ去ったSelfと瞬時に作用し合う。この少し前の（またはかなり以前の）過去のSelfは、後発のegoとの間に心の磁場を作り出し、お互いが波動化しながら二つの世界の境界線（閾値）で共振する。その波動同士の共振・スパーク現象が、変性意識状態のもとで一瞬のスピリチュアリティを螺旋的に立ち上がらせるのである（短時間の生起）。このように論を組み立ててみると、「人生からのメッセージ」を受け入れる場が常に可能性として存在し続けられるではないか。これは新しい心の仮説の誕生である（これからさらに論を煮詰めつつ、11月の学会に備えたい。この論文が発行される頃にはどんな姿を現していることだろうか）。

夢物語のような理論ではある。ミンデルのプロセス指向心理学（最近のトランスパーソナル心理学界においても、かなり重要な地位を与えられている）は、このアイディアに近い。素粒子から宇宙までを包括するトランスパーソナルな考え方（含んで超える）が正しいものであるならば、人間の心や身体諸現象もこの自然の摂理に従うはずである。

フランクが過酷な人生体験によって手にした「人生からのメッセージ」を、筆者なりの螺旋的発達図に当てはめたいと考えたのが、この11月16日の学会発表である。どのような反響をみせるかはまったく分からない。学会のレジメを作成中に中断して一休みした時見た夢は、随分と苦しい悪夢のようなものであった。しかしながら、次の日のトランスパーソナル心理学の授業でミンデル（4冊分）の図表を集めて4年生に説明している時ハッとした。もし、彼の言

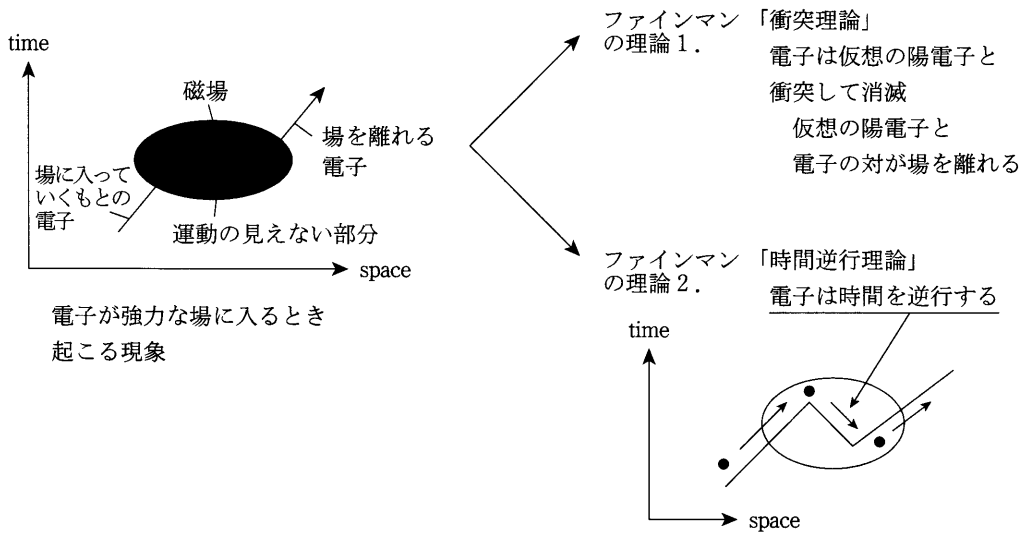


Fig.8 ファインマンの時間逆行理論 (ミンデル, A. 2001より改変して引用)

うドリーミングからドリームランドへと浮上してきたものがあの夢であるならば、変性意識状態でのこのメッセージは、合意的現実ではどういう結果に納まるのだろうか。“逆さ夢として楽しめばよいのだ。”そう考え、口に出した時スーと気持ちちが和らいだ。何とも不思議な体験ではあった（何かに触れたのだろうか。例えば、右の世界からの波動に共振したとか）。

この論文の最初に取り上げた友人との問答は、その後別々の道を歩みながら、私は私なりに時間を掛けて一つの理論を築き上げ、このような形にまとめ上げてきた。自分なりの唯我独尊的な研究の歩みではあったが、他の諸研究と親子の似より感は親和性を持つこともはっきりしてきた。また、40年以上の歳月をかけて創出した自分なりのこの理論は、それなりに愛おしいものではある。これが少しでも世の中のお役に立つことがあれば、これに勝る幸せはない。よくぞここまで一人歩きを続けてきたものではある。

文 献

1. 回避反応の消去法と消去期の研究

- 秋山幹男 1968 回避反応におよぼす消去法の効果 広島大学大学院教育学研究科修士論文抄 昭和42年度（二過程説の修正／闡白）
- 秋山幹男 1968 回避反応におよぼす消去法の効果 広島大学教育学部紀要第一部 17 163-173（CR以外の諸反応も取り上げて分析）
- 秋山幹男 1969 シロネズミにおける回避反応の消去と消去法の関連について 動物心理学年報 19 1-16
- 秋山幹男 1970 集中回避学習におけるCS条件と出現行動の分析からみた消去の問題 広島大学教育学部紀要第一部 19 157-166
- 秋山幹男 1971 回避反応におけるCRと拮抗反応の関係について—先行学習と移行学習の分析より— 広島大学教育学部紀要第一部 20 197-209
- 秋山幹男 1973 全体的な場よりみた条件性回避反応の消去と消去法の意義 PBD編「行動病理学シンポジウム」誠信書房 90-111
- 秋山幹男 1975 消去期の推移からみた往復回避反応に対する消去法の有効性 異常行動（PBD）研究会誌 14 12-21

2. 親子の似より感研究

- 秋山幹男 1974 女子学生における自己と父母の認知について 広島文教女子大学研究紀要 8 23-38
- 秋山幹男 1980 女子学生における自己と父母の認知について（2）—4年間の縦断的研究— 広島文教女子大学研究紀要 15 45-74
- 秋山幹男 1981 女子学生における自己と父母の認知について（3）—タイプ分析の試み— 広島文教女子大学研究紀要16 61-72
- 秋山幹男・有馬道久 1985 女子学生における自己と父母の認知について（4）—因子別得点をもちいたクラスター分析の試み— 広島文教女子大学紀要 20 57-68
- 秋山幹男 1988 女子学生における自己と父母の認知について（5）—三者間の似よりにもとづく分析— 広島文教女子大学紀要 人文・社会科学編 23 83-102
- 秋山幹男 1992 親子の「似より」と女子学生の性格の関連 広島文教女子大学紀要 27 67-88
- 秋山幹男 1993 親子の似よりと自己受容について—女子学生における理想自己と現実自己のズレ— 広島文教教育（広島文教女子大学教育学会） 7 29-48
- 秋山幹男 1994 「親子の似より」研究の現状とパースペクティブ 広島文教女子大学紀要 29 145-169
- 秋山幹男 1997 親子の似より（感）の推移について—女子学生を対象にした4年間— 広島文教女子大学紀要 32 149-163
- 秋山幹男 1998 親と子のかかわり（第4章）神原雅之・秋山幹男・有馬比呂志編著 心をはぐくむ幼児教育 溪水社 56-74
- 秋山幹男 1998 「内なる他者」を見つめる目 広島文教女子大学紀要 33 103-117

- 秋山幹男 1999 女子学生とその両親が捉えた性格の相互認知 —似より感とズレ感をもとにした分析— 広島文教女子大学紀要 34 41-54
- 秋山幹男 2000 若い母親の養育態度と親子(幼児)の性格認知—実父母との似より感をベースにして— 広島文教女子大学紀要 35 113-126 * 1
- 秋山幹男 2001 時間軸と空間軸からみた自己の定位—女子学生の親子の似より感をベースにして— 広島文教女子大学紀要 36 63-82 * 2
- 秋山幹男 2002 心理学的健康と時間軸にそった自己意識 —女子学生の親子の似より感をベースにして— 広島文教女子大学紀要 37 145-163 * 3
- 秋山幹男 2003a 成人における実父母との似より感—女子学生をもつ母親と父親について— 広島文教女子大学紀要 38 165-182 *
- 秋山幹男 2003b 空からくるエネルギーとは何か 広島文教女子大学心理教育相談センター報 11 69-80 *
- 秋山幹男 2004 親子の似より感と結びつき—家族イメージ法を用いた分析— 広島文教女子大学紀要 39 119-137 *
- 秋山幹男 2006 交流分析における自我状態について—女子学生における親子の似より感との関わり方— 広島文教女子大学紀要 41 83-99 * 4
- 秋山幹男 2007 娘は両親のどこと似よるのか—親子の似より感をベースにした分析— 広島文教女子大学紀要 42 25-43 * 5
- 註, これまで* 1~5の論文の後半や*の論文において, 理論構築へ向けての記述はなされた。

3. 理論構築の基盤となった文献

- ベイカー, R. 宮城音弥訳 1975 フロイト 講談社
- ダライ・ラマ14世 ジャン＝クロード・カリエール 新谷淳一訳 2000 ダライ・ラマが語る—母なる地球の子どもたちへ— 紀伊國屋書店 (La Force du Bouddhisme 1994)
- エリクソン, E. H. 仁科弥生訳 1977・1980 幼児期と社会 I・II みすず書房
(Erikson, E. H. 1950 Childhood and Society (2nd.) W. W Norton & Company)
- ファインマン, R. P. 大貫昌子訳 2000 ご冗談でしょう, ファインマンさん (上・下) 岩波書店
- フランクル, V. E. 大沢博訳 1979 意味への意志 プレーン出版 (The Will to Meaning 1969)
- フランクル, V. E. 上嶋洋一・松岡世利子訳 (諸富祥彦監訳) 1999 <生きる意味>を求めて 春秋社
(Frankl, V. E. 1978 The Unheard Cry for Meaning)
- 早坂泰次郎 1994 <関係性>の人間学 川島書店
- 五木寛之・望月勇 2004 気の発見 平凡社
- 五木寛之 1998 他力 講談社
- 伊藤隆二 1989 こころの時代の教育 慶應通信
- 岩田慶治 2005 木が人になり, 人が木になる 人文書館
- 加島祥造 2000 タオ—老子— 筑摩書房
- 加島祥造 2007 老子までの道 朝日新聞社
- 鎌田 實 2000 がんばらない 集英社
- 河合隼雄 1978 ユングの生涯 第三文明社
- 河合隼雄 1996 中年クライシス 朝日新聞社
- 神谷美恵子東京研究会 2006 神谷美恵子の生きがいの育て方 PHP研究所
- ミンデル, A. 高岡よし子・伊藤雄二郎訳 1996 プロセス指向心理学 春秋社 (Mindell, A. 1985 River's Way 1985)
- ミンデル, A. 藤見幸雄・青木聡訳 2001 24時間の明晰夢 春秋社 (Dreaming While Awakening 2000)
- ミンデル, A. 藤見幸雄・青木聡訳 2006 身体症状に<宇宙の声>を聴く 日本教文社 (The Quantum Mind and Healing 2004)
- 宮原安春 1997 神谷美恵子聖なる声 講談社
- 諸富祥彦 1997 カール・ロジャーズ入門—自分が“自分”になるということ— コスモス・ライブラリー
- 諸富祥彦 1997 フランクル心理学入門—どんな時も人生には意味がある— コスモス・ライブラリー
- 森岡正博 1999 現代文明は生命をどう変えるのか 法蔵館
- 村瀬 学 2001 哲学の木—いのちの寓話— 平凡社

人格形成における螺旋的発達理論構築への歩み

- 中沢新一 2003 マトリックスについて—華嚴経・量子論・心理学— 河合隼雄・中沢新一 「あいまい」の知 岩波書店
- 中村雄二郎 1999 正念場 岩波書店
- NHK 2001 NHKスペシャル「宇宙未知への大紀行⑧ 宇宙に終わりはあるのか」NHK教育 2001. 11. 25. 放映
- 西平直喜 1970 新しい存在と価値の発見 津留宏編 青年心理学 有斐閣 133-180
- 西平直 1986 <私>をどう理解するか—H. フロンの<内なる他者>を手掛かりに— 東京大学教育学部紀要 26 197-205
- 岡野守也 2000 トランスパーソナル心理学 青土社
- 小川 侃 2001 雰囲気の中の間人テーマに「環境見つめる知」—新しい現象学より— 毎日新聞 2001. 4. 21.
- 小川 侃 2002 オイコソフィアとしての哲学 毎日新聞 2002. 2. 9. 掲載
- Polin, A. T. 1959 The effects of flooding and physical suppression as extinction techniques on an anxiety motivated avoidance locomotor response. J. Psychol. 47 235-245
- 清水 博 1992 生命と場所 NTT出版
- 霜山徳爾 1978 人間の詩と真実 中央公論社
- 新庄嘉章 1976 ロマン・ロラン 中央公論社
- Solomon, R. L., Wynne, L. C. 1954 Traumatic avoidance learning : the principles of anxiety conservation and partial irreversibility. Psychol. Rev. 61 353-385
- Solomon, R. L., Kamin, L. J., & Wynne, L. C. 1953 Traumatic avoidance learning : the outcomes of several extinction procedures with dogs. J. abnorm. soc. Psychol., 48 291-302
- 葬送の自由をすすめる会 2001 シンポジウム タゴールとガンディー再発見 法蔵館
- 多田富雄・南伸坊 2001 免疫学個人授業 新潮社
- 竹内敏晴 2001 思想する「からだ」 晶文社
- 鶴見俊輔・浜田晋・春日キスヨ・徳永進 1999 いま家族とは 岩波書店
- 氏原 寛 2000 カウンセリングの枠組み ミネルヴァ書房
- 和田重正 1984 もう一つの人生観 地湧社
- フロム, H. 浜田寿美男訳編 1983 フロム／身体・自我・社会—子どものうけとる世界と子どもの働きかける世界— ミネルヴァ書房
- ヴィーダマン, F. 高野雅司訳 1999 魂のプロセス—自己実現と自己超越を結ぶもの— コスモス・ライブラリー (Wiedemann, F. 1986 Between two worlds Theosocial Pub. House)
- ウィルバー, K. 大野純一訳 1996 万物の歴史 春秋社 (Wilber, Ken 1996 A brief history of everything Shambhala Pub. Inc.)
- ウィルバー, K. 吉福伸逸・プラブダ・菅靖彦訳 1997 アートマンプロジェクト 春秋社 (Wilber, K. 1980 The Atman project The Theosophical Pub. House)
- ウィルソン, C. 由良君美・四方田犬彦訳 1998 至高体験—自己実現のための心理学 河出書房新社 (Wilson, C. 1972 New pathways in psychology)
- 吉福伸逸 1987 トランスパーソナルとは何か 春秋社
- 養老孟司・茂木健一郎 2003 スルメを見てイカがわかるか! 角川書店

—平成20年10月31日 受理—